

なのだ。

8月25日(日) LA 深夜1時。ホテルの外で突然の爆発音・・・窓から覗くと一台の車が激しく炎上している。やがてパトカーと消防車が駆けつけた。そして・・・

Little Tokyo 【lítl tóukiou】 **リトル東京**

Little Tokyo 四年間ほど、市の委託を受けて地域の「日本語教室」代表として運営を担当した。集まった人たちは様々。あらゆる年齢層、背景も非常にバラエティーに富んでいた。国籍はブラジル・フィリピン・中国・モンゴル・米国・タイ・オーストラリア・クロアチア・ペルー・イギリス・ヨルダン・パレスチナ人。のべ12カ国にも及んだ。

その中には日本に就労目的で渡航してきた日系人も含まれていた。タダオ(21)やマコト(23)と知り合ったのもそこだ。彼ら兄弟は数年前にブラジルから来日を果たし、熱心に日本語を習得していった。二人はどこか懐かしい「日本人」らしさを一杯湛えていた。早くから遅くまで勤勉に働き、その物腰や言葉使いも同年代の日本の現代っ子とは隔世の感があった。恐らく彼らこそ、我々以上に自分のアイデンティティに悩んできた存在なのだろう。

LAのリトル東京に目を移そう。1885年に最初の日本人が記録されてから、急速にコミュニティが形成されてきた。1941年12月7日、真珠湾を機に強制収容が始まる。リトル東京は、African Americansの住処となった。だが、解放後になっても、二度と戦前の活気を取り戻すことはなかった。別の視点に立てば、時の経過と共に自立を始めたのだ。もはや、マイノリティーとして過酷な米国社会で生き残る手段としての「日系コミュニティ」に頼る必要がなくなったのだ。1990年の国勢調査結果によると、米国のNikkeisたちは85万人で、中国系(165万)・フィリピン系(140万)に次ぐアジア系三番目の人種グループである。1970年から再開発が始まったが、現在は観光地の色は濃いものの、生活の臭いは希薄。

Marion Davies 【mé(ə)rion déivi:s】 **マリオン・デイビス**

Marion Davies オゾンウェルズの映画『市民ケーン(1941年)』を見たのが10年ほど前。予備知識が全くなかったため、ケーンの残した最期の言葉「薔薇の蕾」の謎は深まった。ハリウッド百年記念祭で世界映画ベストテン第一位に選ばれた名作。映画に描かれたケーンは、富と権力を欲しいままにしつつも、孤独な生涯を送って息絶える。そのモデルが、新聞王ハースト(William Randolph Hearst)その人であった。全盛期には26の新聞社・13の全国誌・8局のラジオ局など、全米のメディアを支配して世論を操作した人物。



マリオン・デイビスはハーストの愛人。ハーストの後押しで女優として活躍。出会いは彼女が19歳、ハーストが54歳。チャップリンとの噂はあったものの、32年間に渡ってサン・シメオンの大邸宅(Hearst Castle)で、共に暮らすことになる。

さて、ハーストの切り口はいくらでもある。贅を尽くした大邸宅には動物園や、室内・室外二つのプール、世界中から買いあさった芸術・・・孫娘パトリシア・ハーストの狂言誘拐事件を取り上げるのも興味深い。だが、ここではこんな話題を提供しよう。つまり、ハーストは「排日の総本山」でもあった。イエロージャーナリズムを地で行く手法でハースト系新聞は、日本を「世界制覇」をめざす「文明に対する脅威」と煽った。1924年に『日本人移民禁止法案』成立。これが、17年後の「真珠湾攻撃の遠因」とする識者もいる。